

[連載・第190回]

栽培漁業と遊漁③

マダイの放流効果と協力金(後編)

東京湾や相模湾のマダイ釣りが
種苗放流の恩恵を
受けているのは間違いない。
釣り人としてどうとらえるのか。

写真/文◎ウォーターフロント研究会 鈴木 剛



神奈川県栽培漁業協会の今井利為専務理事。今井さんは前・神奈川県水産研究センター所長で、マダイの種苗生産に長く関わってきた

海辺と魚と人の今...



平成27年度のマダイ放流の様子。ボードには日本釣用品工業会により、金沢中に5万尾が放流されていることが記されている(写真提供:公益財団法人神奈川県栽培漁業協会)

だが、以降は尻すぼみ。やむなく2005年からはマダイ釣船一隻につき1カ月1万円の遊漁船協力金制度が導入された。つまり、釣り人個人よりも遊漁船にさらなる負担を求めた。

数年後、東京湾のマダイは確実に減少する

昨年の放流尾数は72万尾。そのうち協力金(シマノなどの寄付も含む)で放流できたのは8万1000尾分にすぎない。残りの64万尾あまりは漁業者からの事業費、県内の漁協や相模湾推進振興事業団、そして釣り環境ビジョンなどが種苗を購入し、放流している。

釣り環境ビジョンは皆さんもご存じだと思うが「環境・美化マーク」の付いた釣り関連商品の売り上げの一部を原資として行っている環境保全・資源回復活動。その一環として4年前から東京湾へ毎年20万尾のマダイの種苗放流を行っている。放流された種苗は2年ほどで30センチを超え、釣りのターゲットになるのももちろん、産卵に参加する。

ただ、放流計画は5年間。来年度で終了する可能性もある。釣り環境ビジョンの20万尾がなくなると、東京湾でのマダイ

訂正・東京湾に巨大ガニは昔からいます!

届いたばかりの本誌4月1日号を何気なくめくっていると「東京湾に巨大ガニは昔からいます」という見出しが飛び込んできた。読者の皆さんの投稿コーナー「おでこ長屋」である。

ん? 少し前に筆者が書いたような……。投稿を読むと、2月15日号、当欄左下のコラムで紹介した記事についてだった。おなじみのテレビ番組「ザ! 鉄腕! DASH!!」のDASH 海岸のコーナーで、巨大ガニを発見したというスポーツ新聞の記事を紹介したものだ。

投稿してくださったのは東京都のT・Sさん。20数年前から京浜運河で巨大ガニを目撃、捕獲しているそう。

「信じてもらえないと悲しいので、写真を添えて投稿します」と、きつちりと証拠を提示してください。いよいよ、写真がなくても、投稿の内容から真実だと十分にうかがえます。

この投稿に対して編集部では「すごい。これぞ毎日のように海に接している釣り人ならではの貴重な情報」と返している。たしかに現場にいるからこそこの情報であり、発見ですね。あ

りがどうございました。とくに自然界のことは、現場百遍、フィールドワークがいかに大切か、改めて思い知る次第です。

そういえば、開幕直前のプロ野球界では円陣の「声出し」にまつわる金銭授受が波紋を広げている。マスコミはパッシングなどしているが、各スポーツ紙などにはいわゆる番記者がいるはず。彼らは間近で選手に接して、気づかなかつたんですかねえ。それとも知っていても、大した問題じゃないと放置していたんでしょうか。

ま、筆者も大した問題じゃないと思うが、こちらも伝える側の姿勢として、考えさせられます。容疑者からの差し入れの焼肉弁当なんて、食べている場合じゃないですよ。

スタート時に懸念された任意の協力金制度 さて、前回の続き、マダイの協力金について。今回の取材では、前号に示した様ざまなデータも含め、神奈川県栽培漁業協会の今井利為専務理事に話を伺った。今井さんは現職の前は神奈川県水産研究センターの所長を務めていた方で、マダイの種苗生産にもずっと関わってきた。

任意の協力金制度

年々、釣り人口が減少するものの釣り物の種類はバラエティに富んでいく中、魚の王様マダイとはいえ、その都度20円余計に払うシステムはマダイ釣り離れを招きかねない。前号で書いたように初年度こそ、シマノなどからの大口寄付金(その後も継続して100万円が寄付されている)も含めて目標額に近い1200万円が集まっ

アサリ復活の救世主? 浄化剤投入でアサリ激増 有明海

3月9日の静岡新聞(WEB)によると、アサリの漁獲高が減少している有明海の干潟で、水質浄化剤を入れることによって、ヘドロが分解されてアサリが激増したことが福岡大の渡辺亮一教授(水環境工学)らの実験で分かったという。実験に協力した熊本県長洲町や地元漁協でも「アサリ漁復活につながる」と期待しているようだ。

アサリの減少は水質悪化や、川から流れ込む砂が減ったことによる干潟のヘドロ化が要因とされる。渡辺教授らは昨年7月から、長洲町の干潟に浄化作用のある「フルボ酸鉄シリカ」の資材15キログラムが入った袋約50個を投入。長さ100メートル、幅20メートルの範囲内に等間隔で置いた。徐々にヘドロがなくなり、アサリが増加したという。他の海域でも期待できそうだ。

SEASIDE EXPRESS 東京湾再生アンバサダーに 柊アナとガリガリ君が就任

東京湾再生官民連携フォーラムは、3月17日、東京湾の魅力と東京湾再生の重要性を分かりやすく伝えるために、東京湾再生アンバサダー制度を創設、日本テレビのアナウンサー、柊太一氏と赤城乳業のキャラクター・ガリガリ君が初代アンバサダーとして就任した。

東大卒の柊アナは大学時代にアナゴ、大学院ではアサリの研究に取り組むなど、東京湾に対する思いも深い。

一方、赤城乳業は氷菓製造には水を大量に使用することから水への関心が高く、工場からの排水についても独自の環境基準を設けるなど環境対策に取り組んでいる。またフォーラムに対しても過去2年間、寄付を行い、同フォーラムの活動を支援している。